

修士論文（要旨）

2011年7月

向老期ひとり暮らし女性の他者との関係について

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

208J6006

鳥井由紀子

目次

I.	はじめに	1
1.	研究の背景	1
2.	先行研究	1
3.	研究目的	4
II.	研究方法	5
1.	対象者	5
2.	実施時期	5
3.	実施場所	5
4.	調査方法	5
	1) PDM調査	6
	2) インタビュー調査	6
5.	分析方法	7
6.	倫理的配慮	7
III.	結果と考察	7
1.	現在の「親しい」他者との関係について	8
	1) 「親しい」関係の全体像	8
	2) 「親しい」関係別の内訳	9
	(1)身内	
	(2)友人	
	(3)同僚	
	(4)近隣	
2.	今後の「親しい」関係について	15
	1) 既存の「親しい」関係について	15
	2) 新しい「親しい」関係ができる可能性について	16
3.	「老後」について	17
IV.	総合考察	18
V.	まとめ	20
VI.	謝辞	20

引用文献
資料

I. はじめに

1. 研究の背景

日本の高齢者人口は急激な勢いで伸び続けている。なかでも単身高齢者数の伸びが著しい。新しい世代が高齢期へと参入することによって、高齢期の過ごし方についての意識も変化しつつある。このような世代交代による意識変化は女性でより明瞭である。また高齢者の社会的孤立に関する研究の重要性は過小評価されるべきではない。

2. 先行研究

日本では、高齢者の社会関係に関する研究は、家族に関する研究として始められ、後に別居の親族や近隣、友人などをも視野に入れた社会関係の研究へと発展してきた。また質的研究も存在する。高齢者個人に焦点を当てた研究も増加しつつあり、高齢者の意識を中心にするべきだという主張もある。高齢者の QOL を維持していくためにも、他者との関係、交流が彼ら自身にとってどのような意味があるのか、という視点は重要である。

3. 研究目的

本研究ではまず、ひとり暮らし高齢者の数で現在、圧倒的多数を占める女性を対象とし、50代女性に焦点をあてることとした。そして、高齢期に入る手前の世代として50代(50歳～59歳)を位置づけ、「向老期」と操作的に定義する。本研究では、対象女性が、「親しい」他者との関係を現在、どのように形成しているのかを確認し、これまでの「親しい」他者との関係がこれからどのように変化しているのか、また「新しい」親しい関係が形成される可能性についてどのように考えるのか、その思いを明らかにする。これによって本人の視点から、社会的孤立の可能性を探ってみることとする。また男性と同じく長い期間、働き続けてきた本研究の対象者が近隣から孤立する可能性は十分にある。そこで近隣との付き合いについても、その実態を明らかにする。更に、「社会的孤立に陥りやすい」と考えられている単身高齢者予備軍の対象者たちは自らの老後をどのように過ごそうと考えているのか、老後についての考えも合わせて明らかにする。

II. 研究方法

1. 対象者

都市在住の向老期にある職業を持つひとり暮らし女性を対象とした。今回の研究対象者は子どものいない女性に限定することとした。対象者は機縁法により選出した。

2. 実施時期

調査は2010年9月から10月までの間で、協力者の都合に合わせて実施した。

3. 実施場所

実施場所は、桜美林大学大学院四谷キャンパス内教室を原則とした。

4. 調査方法

調査はまず初めに年令、職業、学歴、婚姻歴、ひとり暮らし年数、現在の住居について尋ね、PDM調査およびインタビュー調査を実施した。

5. 分析方法

まずPDMを分析し、次にインタビューデータを整理して文脈毎に整理した。

6. 倫理的配慮

本研究は桜美林大学倫理委員会の承認を得た。

III. 結果と考察

分析にあたってはインタビューデータを中心にすすめ、それをPDM調査結果で補完することによって、考察を深めることを目的とした。また「親しい」関係の現在と今後、即ち将来、というふたつの視点により、考察をすすめた。

1. 現在の「親しい」他者との関係について

「親しい」関係の人数と本人の満足度には関連は見られなかった。親と一定の距離をとっている協力者がいる一方で、親に精神的に依存していると語る協力者もあった。ひとりで暮らしていることが即、精神的に自立しているというわけではないことはよく理解しておく必要がある。また、兄弟姉妹については個人差が大きい。親戚については兄弟姉妹以上に個人差が大きい。兄弟姉妹よりは多少、実利的なものでの判断が働いている可能性がある。「親しい」関係のなかで、友人の占める割合は全体で6割近くに上った。大多数の協力者が友人との関係を大事にしており、精神的な繋がりがあることを語る協力者も多かった。友人は重要な存在で、友人こそが「親しい」関係を支えているといっても過言ではない。同僚は全体で1割強であり、多数とは言えない。職場の仲間が「同僚」である限りはそれほど「親しい」関係にならず、「親しい」関係になると「友人」となるのかも知れない。また近隣との付き合いについて7割が挨拶以上の何らかの付き合いをしている、もしくは今後付き合う可能性を示したということは、予想を超える結果であった。

2. 今後の「親しい」関係について

まず既存の関係については6割が現状維持か前向きな回答であり、既存の関係については変化も予測しながらも半数以上が継続と考えていると言える。関係性について主体性を持って、自分のこととしてしっかりと捉えている回答が目立った。新しい「親しい」関係ができる可能性については、10名中9名がある、と回答した。将来の関係性づくりにこれ程、協力者の心が開かれていることは想定外であった。

3. 「老後」について

6割の協力者が何らかの考えを示した。堅実に自分の老後について検討をしているということの表われと推測される。予想外だったのは10名中3名がこれからの結婚の可能性に言及したことである。向老期にあつては、今後の関係性が柔軟により幅広く捉えられているという事例として注目すべきである。

IV. 総合考察

ひとり暮らし高齢者予備軍である今回の協力者10名を見る限りは、現時点では高齢期に入っても支援を受ける側に入る確率は高くないように思われる。本研究から透けて見える将来のひとり暮らし高齢者の実像は、現在のものとは意識の面では変化していると考えられる。この層をすぐに高齢者支援の支え手として期待することは短絡過ぎるが、この層をどうにかたちで地域社会に定着させていくかを検討していくことの意義は大きい。

V. まとめ

本研究では、向老期ひとり暮らし女性の「親しさ」を中心とした他者との関係の実態が一部、明らかとなった。想定以上にひとり暮らし女性の人間関係は開かれており、社会資源としての活用が期待できる可能性も示唆された。しかし今回の調査の協力者10名の選出は機縁法によるものであり、そのため、調査協力者に偏りがあることは否めない。向老期ひとり暮らし女性の「親しい」関係が本人の老後や周囲に与える影響について結果を得て今後の施策等に活かすためには、このような制約を受けない本格的な調査が必要である。

引用文献

- 1) 平成23年版「高齢社会白書」
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23pdf_index.html
- 2) 白井泉:配偶関係別、高齢者の居住形態コーホート分析と将来推計2005-2025年, 人口学研究, 39, 57-71, 2006
- 3) 西村昌記:「変容する高齢期のライフスタイルと家族関係」, 山手茂(監修)『社会福祉の最前線-その現状と課題』, 相川書房, 2001
- 4) 斎藤政茂, 冷水豊, 武居幸子, 山口麻衣:大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連, 老年社会科学, 31(4), 470-479, 2010
- 5) Findlay, Robyn A.: Interventions to Reduce Social Isolation amongst Older People, Ageing and Society, 23(5), 647-658, 2003
- 6) 浅井達人:「人間関係をとらえる」, 古谷野亘, 安藤孝敏(編著)『改訂・新社会老年学』, ワールドプランニング, 2003
- 7) 古谷野亘:高齢期の社会関係(日本の高齢者についての最近の研究). 聖学院大学論叢, 21(3), 191-200, 2009
- 8) 直井道子:『高齢者のサポートと家族幸福に老いるために』, 勁草書房, 2001
- 9) 野口裕二:高齢者のソーシャルサポートその概念と測定, 社会老年学, 34, 37-48, 1991
- 10) 西村昌記, 石橋智昭, 山田ゆかり, 古谷野亘:高齢期における親しい関係「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択, 老年社会科学, 22(3), 367-374, 2000
- 11) 小林江里香, 杉原陽子, 深谷太郎, 秋山弘子, Jersey Liang:配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果, 老年社会科学, 26(4), 438-450, 2005
- 12) Kohen, Janet A.: Old But Not Alone: Informal Social Supports Among The Elderly by Marital Status and Sex, The Gerontologist, 23(1), 57-63, 1983
- 13) 小田利勝:都市高齢者の友人関係に関する一考察, 神戸大学発達科学部研究紀要, 10(2), 183-194, 2003
- 14) 野辺政雄:高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違いについて, 社会学評論, 50(3), 375-392, 1999
- 15) 前田尚子:友人関係のジェンダー差ライフコースの視点から-, 老年社会科学, 26(3), 320-329, 2004
- 16) 古谷野亘, 西村昌記, 矢部拓也, 浅川達人, 安藤孝敏:関係の重複が他者との交流に及ぼす影響-都市男性高齢者の社会関係-, 老年社会科学, 27(1), 17-23, 2005
- 17) 大森純子:前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記述的研究-関係性の特徴:「気遣い合い的日常生活」-, 老年社会科学, 27(3), 303-313, 2005
- 18) 小倉啓子:特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究-「つながり」の形成プロセス-, 老年社会科学, 24(1), 61-70, 2002
- 19) 田村やよひ:一人暮らしの女性老人のクオリティ・オブ・ライフ-自己概念と Life Satisfaction を中心にして-, 看護研究, 25(3), 69-84, 1992
- 20) 杉岡直人:一人暮らしの高齢者の社会関係に関する家族社会学的研究, 北星学園大学文学部論集, 31, 33-65, 1994
- 21) 和久井君江, 田高悦子, 真田弘美, 金川克子:大都市部独居高齢者の抑うつとその関連要因, 日本地域看護学会誌, 9(2), 32-36, 2007
- 22) 平成22年版「高齢社会白書」

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/22pdf_index.html

- 23) 兵庫県県民生活審議会答申「緩やかなつながりにより社会的孤立を防ぐ地域づくり」,2011

<http://web.pref.hyogo.jp/contents/000183827.pdf>